

宮城から 2 講師 被災体験語る

「生々しい体験発表に胸がつまった」——グループ〈わ〉の第3次東北支援チーム報告会が11月20日、カレッジホールで開催され現役・卒業生ら350人が熱心に聞き入っていました。女川・石巻から2人のゲストを招いたほか、今井鎮雄学長も飛び入り参加され、ロビーでは東北の物産販売、写真展示があり、盛りだくさんな発表会になりました。（広報・南形徹）（2・3面の写真は水嶋和信、木村成男撮影）

東北支援報告会に350人 実演や歌交え多彩な発表

午前10時、海野龍英（食16）の司会で開会。今井学長が「私も昨年夏に東北へ行ってきた。現地では今、何か必要かを考え、神戸ー東北の絆を強くして私たちができることをしよう」と語りかけました。南本伸一・福祉振興協会常務理事は「グループ〈わ〉と協同してやってきた公演活動を今後も続けたい」と挨拶。西田圭一・わ理事長も「これまで3回東北支援チームを派遣したが、来年度もやりたい」と意気込みを語りました。

第3次のリーダーを務めた芦田義和（生15）が活動内容を報告。「7月7日から1週間、17人のチームで女川・石巻・名取・仙台を訪問。仮設住宅・小学校・保育所・児童館など15カ所で昔遊び・大道芸・マジック・民謡・銭太鼓の公演を通じて仮設の皆さんや子供たちと交流してきた。喜んでもらって行った甲斐があった」と強調しました。次いで活動ぶりを記録したビデオ『震災ボランティア奮闘 第3部』（17分）を上映。

続いて、ゲストの武石久美子さん（女川町復興支援センター）が「女川町にある仮設30か所のお世話をしているが、グループ〈わ〉の皆さんの親切心・行動力に大変感謝している。私も身内を亡くしたが、悲しがつてばかりもいられない。生かされた命を大切に、地域の皆さんと生活にメリハリをつけようとかんばっている。モノを作る、一緒に食べるといったことからやっているが、今後もKSCの皆さんの力をお借りしたい」と訴えました。武石さんには第2次チームやKSCの観光ボランティアグループもお世話になっています。

3. 17 生々しい猛吹雪の映像

氏家錦さん（市立仙台商業高教諭）は「炎暑の7月、南三陸でガレキ運びをやったという第1次隊の話聞いて胸が熱くなった。なんとかKSCの皆さんにお礼を、という思いで神戸へやってきた」と切り出したあと、ビデオ映像を映しながら大震災当時の体験を語りました。撮影日は3月17日。大津波で行



▲被災地の現状を語る
武石さん④と氏家さん

方不明になった夫人の両親を求めて、ワゴン車に食料や水を積んで大崎から女川まで走った時の映像です。猛吹雪、壊れた家、ガレキの山、横倒しの船・車、行き交う人々。辛うじて走れる道路。息をのむ光景が展開されており、会場は一瞬シーンとなりました。ご両親の遺体は2か月ほど後に見つかったそうですが、「よくこんな映像が冷静に撮れたものだ」との声が聞かれました。

チームの報告は、銭太鼓やマジックの実演を交えながら、阿部和子（福11）、波多野武郎（食16）内田たみ子（福10）三浦良子（国9）山田保子（音13）の5人が発表しました（要旨は3ページに）。

次いで協会チームの花城アリアさん（歌手）が登場。透き通るような声で「ビリーブ」を歌った後、「初めての支援活動だったので、子供たちにはどんな曲がいいのか、勉強することが多かった。でも、子供たちの笑顔、心の優しさに触れることができて行ってよかった」と感想を語りました。

最後に、アリアさんを囲んでKSCチームと、ゲストの武石さん、氏家さん、会場の皆さんが一緒になって「ふるさと」をうたい、東北の復興を祈りました。

体験報告会は2011年に続いて2回目。今回はゲストで招いた武石、氏家さんの話が特に印象深かったようです。2人とも身内を亡くされており、体験談や近況の話の一節、一節が心の琴線ふれたのか、観客席では涙ぐむ女性もいました。